

戦後、日本の中でもかなり小さな徳島県の阿南市で誕生した日亜化学工業株式会社（元：共同医薬研究所）は本当に小さな企業であった。しかし、日亜化学工業(株)は着実に成長し、1993年青色発光ダイオードの完成によって、今や日亜すなわちLEDとみなされる大企業へと発展した。1956年に誕生してから今に至るまで、一体どのようなプロセスを経て日亜化学工業(株)は急成長を遂げたのか？このような疑問をもってこの調査研究「日亜化学工業成長の分析」を行った。

創業者、小川信雄氏には、当時の同業他社が考えつかなかったアイデアと、独自の発想があった。このことは、おそらくは、氏および家族の過酷な境遇、そして氏の軍経歴に起因すると考えられる。氏の事業に端緒を与えたのは、那賀川一帯に豊かに産する石灰石であった。これは通常、建設用あるいは農薬用につかわれていたが、氏はこれから戦後結核の特効薬となったストレプトマイシン（1944年発明）製造用の塩化カルシウムを調整し、製薬会社に販売した。この販売が順調にすすむのと平行して、蛍光灯用蛍光体のリン酸カルシウムを精製して、電気業界への進出をはかった。日亜の精製したリン酸カルシウムは、とびぬけて品質が良かったとされ、やがて、蛍光体の国内シェアはトップに、世界でも5指に入るメーカーへと成長している。常に次をみすえ、事業の方向を考えている。すなわち、各種蛍光体を扱い、また蛍光灯だけでなくテレビ用蛍光体へと範囲を、得意分野から、拡大していった。やがてGaメタル精製をきっかけとして、化合物半導体への進出をはたし、青色LEDを開発する。これが、日亜伝統の蛍光体技術と結合して白色LEDランプが世界を席卷した。